水不足

・台風すら期待の他力本願・

夏台風特有の迷走を続けた台風七号が四国に上陸、深刻な水不足の吉野川水系の水源地にも三百ミリ近い大雨をもたらした。まさに旱天の慈雨となったが一気の解消までとはならなかった。

今年の水不足の原因は空梅雨気味による少雨によるもので、瀬戸内から九州北部にかけての渇水が日に日に深刻さを増してきている。年間の降雨量の三分の一が降る梅雨は初夏と盛夏をわける日本の雨季であり、空の水道と呼ばれている。昨年は冷夏とともに溢れるほどの雨が降り続き、一転して今年は早い梅雨明けと連日の猛暑となってしまった。降るべき雨が降るべき時に降ってくれないと目算が狂って水不足となってしまう。

日本における水道の年間の使用量は三百二十億トン、一人あたり一日、〇・三トン程と年々増え続けている。都市への人口集中、都市型の大量消費傾向に加えて、一人あたりの水の使用量が二人以下の世帯に比べて五人世帯の一・五倍程となる核家族化が拍車をかけている。

水需要は二十年間で二倍のペースで増え続ける水需要にさらなるダムをつくるか、水のリサイクルを徹底しなければ限界がきてしまう。雨水を貯めて雑用水に使っている両国国技館のように雨水を都市の水源として利用など対策が求められている。

梅雨前線が消えたいま、水不足解消の鍵を握っているのは、大規模な雷雨と台風の襲来である。並みの台風がもたらす雨はおよそ二百億トンと計算されており、まともに降れば、その一パーセントで四国の水ガメを満杯にできる。空の給水車、真水の巨大タンカー」と呼ばれている所以である。

ただ、その台風も風まかせで太平洋高気圧の勢力が強いと日本に接近できずじまいとなる。「雨乞い」ならぬ「台風乞い」となりそうだが、都合のよい時だけ襲来を望む人間のるが、身勝手な望みをかなえてくれるだろうか。台風にも台風の意地がありそうである。